出会いと別れ

慎太郎は、リヤドの生活は二度目だったが、それでも、近代都市東京から来るとその差はいかにも大きく、時折、カルチャーショックに悩まされていた。そして、その都度、それに馴染まされて行った。

前回赴任時にもそうだったが、慣れるまでは、不用意にショッピングに出かけて、思わず、お祈りの時間にぶつかり店から締め出されてしまうことがあった。サウジは、最も厳格なイスラムの国だから、お祈りの時には一斉にきっちりと店を閉めてしまうのだ。買物客は、追い出されてしまえば外で、中に居れば中でそのまま概ね三〇分ほど為すすべもなく時間を潰さざるを得なくなる。

慣れてくると体が覚えてきて自然とその時間を避けるようになるが、慣れすぎると、また、ちょっとした心の緩みで凝りもせずに締め出しにあってしまうことがある。

そんな時に、悔しいとか残念だとか思わなくなるのは慣れ

だった。

大概、このようにして、サウジの生活、習慣などに慣れてゆくことになる。

ちょっとした修理を頼んでもなかなか修理人が来ないで最初は腹を立てたりするが、随分と遅れても悪びれも無くニコニコとやってくる修理人の顔などを見たりしていると、不思議なもので、責める気にもならず、終いには、逆に何故自分はそのように焦っていたのかなどと感じるようになってしまう。

そして、サウジでは、酷暑のせいもあるが、のんびりやるのが良いと悟るようになる。待てば済むことは待てば良いと考えるようになるのだ。不思議なものだ。

厳格なイスラムの国、サウジでは、クリスマスのセールなどは一切ない。クリスマスツリーなどは見られず、ジングルベルも聞こえない。街はまったく普段のままで何も変わらない。日本では十二月に入ればクリスマスセールが始まり、大

きなクリスマスツリーが商店街に飾られたりして賑やかになる。忘年会も盛んだ。そのような生活に馴染んで来た慎太郎には、リヤドの十二月は寂しく感じられた。

慎太郎は、リヤド支店の日本人が次々と年末年始の休暇を決めて行く中、一一月に来たばかりだったし、未だに休暇を決めかねていた。また、慎太郎にとって最も重要な特命に対する準備もあった。

その点、サウジの役所は、年末も普通どおりで慎太郎には好都合だった。慎太郎は、オスマに運転を頼み、殺風景な師走の街を抜って石油省へと出かけて行った。

石油省のセキュリティ・チェックを終え、ロビーに入って、慎太郎は驚いた。

ロビーに置かれたソファーに、あのナセル前石油相の秘書だったアブダラーが座っていたからだ。しかし、そんな筈はないと直ぐに思い直した。

一九九五年の内閣大改造でサウジ石油相は、ナセルからア

ハマド・アリへと変わり、アブダラーは、遠くヤンブー工業地帯にある石油省関連の会社へと転勤になっていた。慎太郎は、この異例の人事に心配してアブダラーに手紙を送ったところ、何の心配もないとの返信が来てそれきり音信不通になっていた。リヤドに戻った気配は全くなかったのだ。

現に、その人が慎太郎と気づくことはなかった。

他人の空似とは良く言ったものだと慎太郎は思った。

アブダラーそっくりのその人はサウジの民族衣装であるトーブの上に身分の高いものが羽織るのと同様の、金色の刺繍の付いた茶色のローブをまとっていた。その姿格好はまるで貴公子のようだった。

彼は慎太郎の気を惹いたことを察したのか、慎太郎の方に向いてそのインテリ風の眼鏡の奥から親しげな目を見せた。

「アッサラーム、アレイコム」

慎太郎は、反射的にアラビア語の挨拶で声をかけてしまった。するとその貴公子は、アラビア語で挨拶されたのが嬉し

かったのか、相好を崩して、
「アレイコム、サラーム」
と応じた。そして、立ち上がりながら、
「君は日本人かね」
と流暢な英語で親しげに話しかけてきた。

「はい、日本人です」
普段、街では外国人達が気楽に国籍を聞いて来ても、慎太郎は、国籍を応えないことにしていた。日本人も沙漠のサソリに狙われていたからだ。時には、中国人と応えたりした。中国人と応えても誰も中国語で話しかけてくるものはいなかったし、慎太郎はどこにいても時に中国人と間違えられる程だったので誰も疑わなかった。
しかし、この時ばかりは素直に応えた。

「ようこそサウジアラビアへ」
と一メートル八〇センチ以上はあると思われる長身で体格の良い威風堂々とした貴公子は、慎太郎の方に手を差し伸

べて来た。

「始めまして、池波慎太郎と言います。お会いできて光栄です」

慎太郎は、そう応えながら、差し出された手を握ったが、その柔らかで暖かい感触は、まさに高貴な者のものと思えた。

この時、慎太郎は不思議にあの故アラファト前ＰＬＯ議長と握手した時の感触を思い出していた。

貴公子からは、バラのような芳しい臭いが漂ってきた。サウジ人は、大体、男性も香水を付けている。アラブ特有の臭いもあれば、フランスの香水のような臭いのものもある。臭いで個性を際立たせているようなところがあった。

貴公子の香水は、アラブ特有のものだったが、何とも言えない優美なものだった。

「私の名前はスルタンです。宜しく」

とその貴公子は名前を名乗った。

慎太郎は、もう少し話を続けたかったが、石油大臣秘書室に行かなければならないところだったので、挨拶に名刺を渡しただけでその場を後にした。

スルタンは、この時の印象が余程深かったのか、慎太郎が会ったことを忘れたくらい時間の経った翌二〇〇四年三月に彼の名刺に記された携帯電話に電話を掛けてくることになる。

アハマド・アリ石油相の秘書官は何人かいて、慎太郎はまだ第一秘書官には会えなかった。相変わらずパキスタン人の秘書官アブドル・アミーンが彼のカウンターパートだった。前回赴任時を思うと慎太郎にはいささか不満だったが、民間会社の中堅社員への対応としてはこれが適当かもしれないとなんとか自分を納得させていた。

アミーンは、それなりに有能で、しかも、いつも約束通りに彼を待っていてくれて、いつでもお茶を出したり、デーツ(ナツメヤシ)を出したりと彼を歓待し楽しく話をしてくれ

たので、その点では満足していた。慎太郎は、焦らず、まず、石油省に馴染むように努め、東京から幹部が来易いようにゆっくりと地ならしをしていた。

アブドル・アミーンは、その都度、石油省内のアジア関係の担当者などを紹介してくれていた。そのランクは徐々に上がっていった。ただ、上がっていくに従い、扱い難そうな人間も出て来た。日本の女子プロレスが好きだと言って、そのビデオが欲しいと言い出すものもいた。この国に限らず、いろいろ注文をつけるものは出てくるものだ。ちょっとしたことを依頼してみると、そっと机の引出しを開けるものもいた。そこに、何気なくお金を包んだ封筒をそっと入れると、何気なく引き出しが閉められ、以降、物事が簡単に進むこともあった。海千山千の慎太郎は、そのようなことには慣れていた。むしろ、付かず離れず、一定の距離を置きながら、徐々に食い込んで行くのは得意だった。

いつしか、ラミアが事務所を離れる日が来た。佐々木支店

長を始め日本人は年末年始を日本で過ごすため、慎太郎と留守番一人を残し、既にリヤドを離れてしまっていた。一際淋しい別れだった。ラミアの送別会は皆が居る内に既に済んでいた。

「ラミア、一緒に働いたのは短い期間だったけど、楽しかったよ。いろいろとお世話になり、有り難う」

「池波さん、私も楽しかったです。有り難うございました」

「元気で頑張ってね。ところで、ラミアはこれからどうするの。お国のレバノンにでも帰るの」

「いえ・・・、池波さんは知らなかったんですか。私はレバノン人ではないんです。ベイルートから来ましたが、パレスチナ人なんです。難民なんです。帰る国などどこにもないのです」

慎太郎は、済まないことを言ってしまったと思った。何故、パレスチナ人かも知れないことが想定出来なかったのか。多いにあり得ることではないか。ラミアはベイルート出身と言っていたし、レバノンの話題も多かったので、レバノン人と勝手に思いこんでしまっていたのがいけなかった。笠原もそ

んな話はしていなかった。もっとも慎太郎が笠原に質問しなかったのがいけなかったのだが・・・こんな時に、慎太郎の居候ぶりが痛いほど感じられた。また、こんな時に、相手の職業、出身などを敢えて聞こうとはしないマイナス面が出てしまった。

「ご免、ラミア、知らずにラミアを傷つけるようなことを言ってしまって・・・」

慎太郎は素直に謝った。

「私こそ、済みませんでした。つい、お国という言葉に敏感になってしまって・・・」

「昔、台湾の留学生から国が無くなるということがどういうことが分かりますかと言われたことがあってね。それ以来、肝に銘じて分かったつもりでいたんだけど・・・済まないね」

「良いんです。ミスター・イケナミは知らないで喋ったことなのに、そんなに謝ってくれて・・・本当に心の優しい人なんですね。つくづくもっと長く一緒に仕事をさせてもらいたかったと思っています。残念です」

「残念なのは僕の方だよ」
慎太郎は、ラミアの手をきつく握り締めながらそう言った。ラミアも握り返してきた。その手は飽くまで柔らかく、しっとりとしていた。
「ラミア、お別れに、香水をあげるよ。気に入ってくれると有り難いんだけど」
慎太郎は、大王の香水師から買っておいた小瓶を取り出すと、ラミアに渡した。
「わ〜、有り難う。開けて良いですか」
「勿論、開けてご覧」
ラミアは、小瓶の蓋を開けて臭いを嗅いだ。
「すっごく良い臭いですね。これはインドの香水ではないですか」
「良くわかったね」
「やっぱり・・・随分高かったんでしょうね。有り難うございます。大事に使わせてもらいます」
「ほんの少しだから、それほどはしなかったよ。気に入ってくれて良かった」

ラミアは、本当に嬉しそうだった。そして、いたずらっぽく笑うと、いきなり慎太郎の頬にキスをした。

「ミスター・イケナミ、有り難う。これでお別れですね。いずれ、また、どこかで会えると良いなと思っています。お元気で」

「ラミアも元気で。本当に、またどこかで会えると良いね」

二人は、最後に固い握手をした。慎太郎は、その柔らかいラミアの手の感触をいつまでも忘れることが出来なかった。

ラミアは、慎太郎からもらった香水を大事そうにハンドバッグに入れると、何度も慎太郎の方を振り返りながら、支店を出て行った。

頃合いを見計らって、窓から下を見ると、丁度、ラミアがオスマの車に乗り込むところだった。慎太郎の視線に気がついたラミアは上を見上げて盛んに手を振った。慎太郎も、それに応えて手を振った。ラミアの目にはうっすらと涙が流れていたが、遠く離れた慎太郎にはそれが見えなかった。

慎太郎は、いつまでも遠ざかる車の影を追っていた。

結局、慎太郎は、リヤドで年末年始を過ごすことになった。前回赴任時には、帰国して日本の年末年始を楽しんだので、今回は、生まれて始めての異国での年越しだった。

リヤドの年末年始は静かなものだった。

ムハヤ・コンパウンド爆破事件以来、テロ事件が報道されることはなかった。最重要指名手配者リストが内務省から公表された直後に、治安部隊とテロリストとの間の銃撃戦があったものの、その後は大規模な捜索、戦闘が報じられることもなかった。むしろ、一二月三〇日には、最重要指名手配者リスト中の一人が自首して、より落ち着く方向にあった。

そうではあったが、慎太郎は、緊張感が途切れないように気を付けながら生活を送っていた。

翌年二月以降にテロリストと治安部隊の死闘が繰り広げられるようになるなどとは慎太郎はこの時は思いも寄らなかった。

イスラム暦では一年間の日数が西暦より一一日間少ないので、もともと正月のタイミングが一緒ではなかった。加えて、そもそもムスリムにとって正月はあまり意味がないものだった。特にお祝いをするわけではない。イスラムでは最大の祭りはラマダン明けの祭りで、それは既に終了した。次の大きな祭りは巡礼月のイード・ル・フィトル(犠牲祭・大祭礼)だが、これは翌二〇〇四年の場合は二月上旬でまだ先の話だった。

強いて正月らしさと言えば、慎太郎が日本の実家に新年の挨拶で電話を入れた時くらいだった。それもサウジと日本との時差が六時間あるのでリヤド時間では三一日の午後六時過ぎと言うことで、あまり新年の実感が湧くものでは無かった。

実家の両親は、慎太郎の電話を喜んでくれた。日頃メールでやりとりをして近況は連絡していたが、やはり声を聞くのが一番だった。慎太郎も両親が直ぐ脇にいるような気持ちになった。両親の声からは慎太郎の身を案じている気持ちがひしひしと伝わってきた。長い時間ではなかったが、久し振り

に両親と話をして大分気が楽になった。また、平和な日本にいる両親と話をしていると、リヤドで相当の緊張感を持って日々を過ごしている自分の姿がより鮮明に目の前に浮んできた。そして、このようにちょっぴり正月らしさを味わうことによって、慎太郎は、ようやく、新年の抱負、異国での心構えを固めることが出来た。

リヤド支店でも忘年会、新年会を行ったが、年末年始は、大体、皆、帰国してリヤドには居なかったので、閑散としたものだった。また、リヤドの日本人会では忘年会や新年会が開催され、日本大使館も新年会を催した。

しかし、慎太郎は、特命でリヤド支店に籍を置いていただけだったし、他の日本人とは日頃の仕事上の繋がりも特になく一定の距離を置いていたので出席することは無かった。

レジデンス内の外国人達とすれ違う時に、ハッピーニューイヤーと言われたりすると、ああ新年になったのだなとようやく思い出だすくらいレジデンスでも正月気分が希薄だった。イブラヒムはムスリムだったが、会った時にはハッピー

ニューイヤーと言ってくれた。慎太郎は年明けの挨拶をインド人であるイブラヒムと最初にするという、生まれて初めての寂しい正月を体験した。

慎太郎はイブラヒムの顔を見て、イブラヒムが、以前インド石油ガス相がサウジに来ると言っていたのを急に思い出し、訊いてみた。

「イブラヒム、そういえば、君は昨年インドから石油ガス大臣が来ると言っていたが、何時になったの」

「月末頃になりそうだよ。年初は忙しかったみたいだ」

「そう、それじゃ、君は、それまで、少しゆっくり出来るね。しかし、大臣と友達とは君も凄いね。良かったら、ダス大臣がインドに帰った後にでも、どんなことをサウジと話し合ったのか教えてよ」

と慎太郎はイブラヒムに頼んだ。

慎太郎は、インドのダス石油ガス大臣のサウジ訪問にそれほど興味があったわけではないが、中国と並び石油需要が急伸しているインドとサウジアラビアの間の話し合いにはそ

れなりに興味があった。
「うん、いいよ。それじゃ、大臣が帰った後に教えて上げるよ」
とイブラヒムは快く応じてくれた。

そして、一月末に約束通り、イブラヒムから電話があった。
慎太郎は、イブラヒムを日本レストランに招いて話を聞くことにした。
リヤドには日本レストランがいくつかあったが、支店の仲間と普段良く行っている手頃な“東京レストラン”に連れて行くことにした。手頃とは言っても中華料理店、インドレストランに比べれば、より高級でイブラヒムは喜んでくれた。
日本料理は、ダイエットに良いということで、最近、肥満の多いサウジ人には大人気となっていた。この店にもサウジ人が多数来ている。イブラヒムはテキサス留学時代に日本レストランに行ったことがあり日本料理のことを良く知っていた。生ものも大丈夫ということで、慎太郎は鮨を中心にして酢の物、刺身、煮物、焼き物、天麩羅、そして蕎麦など典

型的な日本料理を一通り注文した。

「ところで、テキサスで知り合った人というのは、どんな人なの」

慎太郎は、まず、テキサス留学時代の話から始めることにしてイブラヒムにそう聞いた。

「ブーム・ピキンズと言ってね七〇近い老人だった。今はもう八〇近いんだと思う。もともとはジオロジスト(地質専門家)だったんだけど、石油会社を設立して敏腕を発揮したらしい。八〇年代には企業買収で名を轟(とどろ)かせたんだけど、その後、天然ガス価格が下落した時に会社を手放す羽目になってしまった。この時は最悪の状況だった。しかし、その後、投資会社を作ってなんとかそれを軌道に乗せることが出来た。まるで、不死鳥のように蘇(よみがえ)ったんだ。そして、ここのところ、原油価格が上がってきて大分脚光を浴びるようになった」

イブラヒムは、ピキンズのことを余程好きなようで、とうとうとまくしたて始めた。

「ピキンズは、石油生産のピークが早く訪れると考えるピークオイル論者で、昨年も、世界の石油生産量が一日当り八二〇〇万バレルを超えることはないと発言して話題を呼んだ。今後、中国、インドの石油需要が増えるし、需給はタイトで原油価格は上がり恐らく五〇ドルになると予測している。三〇ドルに戻ることはないだろうと見ているんだ」

慎太郎は、ダス・インド石油ガス石油相のサウジ訪問の話を聞く前にちょっとテキサス時代のことを聞いて見たかっただけだったのだが、思わぬ方向に話が進んでしまった。

「イブラヒム、だけど、ピークオイル論というのは昔からある話で、いつ石油生産がピークを迎えるかについては、いろんな説があるし、ピークはそんな近い時点の話ではなさそうだけど・・・現にここのところは原油価格は下落気味なんじゃないかな」

慎太郎は、イブラヒムの話に多少水を差す言い方をしたが、イブラヒムは、慎太郎のそのような物言いに不満げだった。

「シンタロウ、僕はピキンズを信じて見たいと思っている。仮に彼の言う通りに原油価格が上昇して行くのであれば格好の投資材料となる。先物市場では、君も知っている通り、契約単位を一枚と言い表すんだけど、これが一〇〇〇バレルだよね。従って、現在一バレル三〇ドルだから一枚三万ドルになる。仮に一バレル五〇ドルになったとすれば、これが五万ドルになるわけだ。たったの一枚で二万ドル儲かることになる。取引手数料などは、払っても知れているから、ほとんど丸々儲けと考えて良い。一〇枚で二〇万ドルの儲け、一〇〇枚で二〇〇万ドルの儲けか。これは堪えられないよ」

イブラヒムは、既に儲けたようなつもりになってニコニコ顔で話した。

「だけど、イブラヒム、逆に原油価格が下がれば大変な損失になるよ」

「うん、それはそうだ。慎太郎。あ、そうそう、君は大臣の話を聞きたがっていたんだよね。それを話そうか」

とイブラヒムは、先物の話をそこで終わらせた。

「大臣は石油ガス大臣としては珍しく外交官で、文化人としても著名な人なんだ。大変な人格者だし評判は良い。彼はインド発展のためには石油が不可欠で、サウジとは関係を深め、将来の石油供給を確保したいと思っている」、

「今回の訪問もその流れの中で、具体的な協力関係の構築に来たようだ。サウジも前向きで、双方で製油所を作って行くことなどを検討したようだ。ただ、大臣は、やはり低廉な適正価格での供給を望んでいて、健全な市場での適正価格実現を強く志向している。インドの人々のことを常に考えている志の高い人だね」

と説明を始めた。

「大変、興味がある人だね。君の国は良い人を大臣に持ったようだ。ところでその大臣は君とはどんな話をしたんだい」

「大臣は、石油先物市場について教えて欲しいというので、ＮＹＭＥＸやＩＣＥ(インターコンチネンタル取引所、旧ＩＰＥ)の話をした。大臣はすぐに理解して強い関心を

示したよ」、

「困ったことに、石油先物市場が投機の場と直感的に捉えて、資金のあるものは何でも出来るねなどと言っていた。先物は基本的にはリスクヘッジの場でその意味で透明性もあるし健全な場だと説明したんだけど大臣を上手く説得することは出来なかった。特に、石油先物市場での非当業者の影響力増大やＩＣＥの米国内での取引に関してはチェック体制が不備な点を問題点として指摘していた。鋭いよね」

「石油大臣だから当然かも知れないが、良く勉強しているんだね」

慎太郎は、インドの石油ガス大臣は問題意識の高い優れた閣僚だと感心した。

しかし、慎太郎としては、インドがサウジと共同で製油所を建設するという話の方により関心があった。

サウジアラビアは、灼熱の国との印象が強いが、沙漠に囲まれたリヤドの一二月、一月、二月は寒かった。

最低気温は、一〇度台になるし、時には零度以下となるこ

ともあった。ただ、レジデンス内は、自動温度調節で、車内、事務所内も暖房をしているから、慎太郎が寒さをそれほど感じることは無かった。

自動車に乗るまでの僅かな時間や、寝床が寒く目がさめる時があるなどと言うオスマの話などを聞いて、やっと冬の寒さを感じることが出来た程度だ。

慎太郎は、オスマと三ヵ月間くらいは懸命に生活に必要なものを買うなどして忙しかった。

オスマは、運転は確かだし、買物でも至極押しの強いところがあって助かった。サウジ人の経営する商店に行く時には、大変心強い存在だった。時には、慎太郎が頼みもしないのに、慎太郎に成り代わってサウジ人の商人と交渉してくれた。

「サー、いや御免なさい。ミスター・イケナミ、今日は、駱駝のミルクの売り出しの日だから、買ってきてあげますよ。何本欲しいですか」、

「ミスター・イケナミ、今日はワイシャツのクリーニングは

出さなくて良いですか」、

「ミスター・イケナミ、今日はタミミ・スーパーで買物の日ですよ」

と、オスマは、大変、面倒見が良かった。

スーパーなどでは、商品の吟味に余念がなかった。目が良いのか、素早く賞味期限を見つけ、最も新鮮なものを素早く選んでいた。買物をしたものもせっせとまとめ、袋に入れて、レジデンスまで運んでくれた。

レジデンスに着くと、すぐにベルボーイやレセプションに、パッケージワゴンを持ってくるよう頼み、あっと言う間に、車から移し変えていた。

オスマは、普段、事務所では、お茶を飲んでゆったりとしているが、このような時には素早かった。

また、慎太郎は、オスマを通じて、貧しいが誇らしげなサウジ人の生活、それに、普段、オスマが付き合っているインド、スリランカ、フィリピンなどからの出稼ぎ労働者の生活などに関する情報も聞けた。

サウジには、約三〇〇万人の外国人労働者がいるが、その暮らし振りは様々だった。

高給のとれる専門性の高い仕事をしているものもいれば、薄給の、３Ｋなど決してサウジ人が付こうとはしない仕事をしているものもいる。

とは言っても総じて薄給のものが多い。

歩道に溜まった砂、ゴミなどを清掃する掃除夫は月収二五〇リヤル(約七五〇〇円)にしか過ぎない。しかも、給料の支払いが遅れることが多い。幸い、食糧と住宅を支給されていることが多いので助かっていると言った状態だ。

勢い、アルバイトをせざるを得なくなる。お茶汲みの職があれば、月五〇〇リヤル程度の追加的な定収が見込まれる。その他、ゴミ出し、買物などの使い走り、ガスボンベ交換などをして六〇〇リヤル程度の収入を得ているものもいる。洗車は一台当り一月五〇リヤルで請負、とっぽいものはこれで月に二〇〇〇リヤルも稼ぐ。

しかし、いずれにしても、出稼ぎの悲哀はある。

横柄なサウジ人にこき使われ鬱屈(うっくつ)しているも

の、サウジ人の女主人に虐待されているメイドも多い。虐げられた生活の中で、サウジ人に対する恨み辛みをじっと溜め込んでいるものが殆(ほとん)どだ。

アブハの貧困層の出身であるオスマには彼等の気持ちが痛いほど良く分かった。

時には、友達の運転手が、サウジ人女性の浮気事件に巻き込まれたことなども、面白おかしく喋ったりしてくれた。

サウジでは、女性は運転出来ないので、買物に行くにも、夫や親など男性に運転を頼まなければならない。

しかし、夫などもそうそう時間がとれないので、勢い、職業運転手、タクシーなどが必要になる。

ある時、客のサウジ人女性が、スーパーに着くと、小さな子供を車の中に置いたまま買物に出かけ、なかなか帰って来なかった。その友達は心配になったが、なにしろ、女性は黒

いアバヤを羽織っているので彼女の子供でさえも自分の母親を探すことが出来ない情況だった。しばらく途方にくれていた。そして、閉店になっても車に戻ってこないので、止む無く子供を連れて客の家に帰ったところ、彼に女性誘拐の嫌疑が掛かってしまった。

警察に行って、釈明している内に、その女性が、ボーイフレンドの車で事故に会い死亡してしまったことが判明して、ようやく容疑が晴れたのだという。

そんな話を、訥弁ながら、時折、慎太郎に話してくれた。

こんなことは、稀(まれ)な話なのかも知れないが、厳格な規律のこの国でも、欧米あるいは日本と同じように主婦の浮気事件が起きていることが分かった。

このようにして、オスマのお蔭で、慎太郎は、サウジ人の生活ぶりを広く詳しく知ることが出来た。

二月に入るとようやく生活を落ち着かせることが出来た。皮肉なもので裏腹に治安が急に悪化した。

二月一三日、サウジ内務省は、爆弾テロの危険性を警告した。そして翌一四日には、爆発物を搭載したＧＭサバーバンに関する情報を提供したものには七〇〇万リヤル(約二億一〇〇〇万円)の報賞金を支払うことを発表した。暫く静かだったリヤドはこれで一挙に緊迫感を増した。

しかし、悪いことばかりではなかった。そんな中、日本から有り難い便りがやってきた。外務省で同期だったアラビア語キャリアの林幸次がリヤドの日本大使館に勤務になるというのだ。

林は、公式には赴任当初は一等書記官で赴任中に公使になるのだが、ローカルランクで最初から公使の名称を使用すると言っていた。

慎太郎は、公使といえば大使に次ぐ要職(次席)だから、林も随分出世したものだと感心していた。

もうそんな年齢になったのかと月日の経つ早さにも感慨深いものがあった。

慎太郎は、上手い巡り合わせになって来たとその幸運さに感謝した。

林もリヤドでの慎太郎との再会を楽しみにしていた。